

「安楽国」と「日本国」

山本 大介

——『日本靈異記』における天皇と自土意識——

はじめに

我、聞く所に従ひて口伝を選び、善惡を儻ひ、靈奇を録す。願はくは、此の福を以て群迷に施し、共に西方の安楽国に生まれむことを

『日本靈異記』（以下『靈異記』）は、跋文において、善惡の「靈奇」の口伝を記した『靈異記』の福德をもつて衆生を回向し、共に西方安楽国へ生まれ変わることを願う景戒の思いが述べられる。善惡の表として示される仏の奇瑞を集積するという『靈異記』撰述の実践の先に、景戒は仏道の境地である安楽国という「異界」への転生を志向していた。

安楽国への転生とは、延々と繰り返される六道輪廻の転生を離れ、仏果を得ることを意味することは言うまでもない。西方極樂世界への願望は跋文だけに留まらず、中巻序文や下巻序文などでも繰り返し言及されており、『靈異記』編纂の実践と安楽国への転生を願う景戒の志向は不可分といつていい。『靈異記』撰述とは「西方安楽国に生まれむ」ための実践であった。

ところで、安楽国への転生を願った景戒の宗教実践である『靈

異記』の編纂とは、「自土の奇事」つまり「日本国」にあらわれた仏の靈験を集積し衆生に説くことであった。

善惡の状を呈すにあらざるは、何を以てか曲執を直して是非を定めむ。因果の報を示すにあらざるは、何に由りてか、惡心を改めて善道を修めむ。昔漢地に冥報記を造り、大唐国に般若驗記を作りき。何ぞ、唯他國の伝録に慎しみて、自土の奇事を恐れざらむや。 （上巻序文）

衆生が回心して仏法を信心するためには「靈異」として示される善惡の因果を知ることが不可欠であるとしたうえで、中国の『冥報記』『般若驗記』ばかりでなく「自土の奇事」を信じ畏怖することを説く。因果の理法を「日本国」の「奇事」を通して感得することに景戒の主眼があった。

このような景戒の「日本国」に顕現する奇瑞への志向——自土意識——について、多田一臣氏は、「この現世にうごめくもろもろの衆生の中に、因果の理が貫徹しているという冷厳な事実を確認すること」と、「この日本を仏法の威光の高揚する一つの聖朝として、律令政治体制の称揚・賛美の形で捉えようとすること（＝国家意識）」の二つの側面を指摘する。このことは、「自

土の奇事」の集積により、「日本国」が仏の感應において大陸に比肩する仏国土であることを發見・確認することにほかならない。安樂国を志向する景戒の宗教実践という側面と併せて考えると、「自土の奇事」の集積による仏国土「日本国」の發見という実践の先に、景戒は安樂国への転生を志向していたことを意味する。言い換えれば、『日本靈異記』という実践において、日本を仏国土と捉える自土意識と安樂国への転生の志向は不可分であるといえよう。

本稿では、日本国を仏国土として捉えようとする『日本靈異記』の自土意識との関係に注目しながら、人間界からみて（異界）である安樂国というトポスについて考えたい。

一 安樂国——語られぬ仏の世界——

安樂国とは「極樂」「安養」等と称する西方阿彌陀仏浄土の異名の一つである。浄土經典の一つである『無量壽經』によると阿難白^レ佛。法藏菩薩、爲已成佛而取^レ滅度、爲未^レ成佛、爲今現在。佛告^レ阿難。法藏菩薩、今已成佛現在^レ西方。去^レ此十萬億刹。其佛世界名曰^レ安樂（……）無^レ有^レ三塗苦難之名^一、但有^レ自然快樂之音^一。是故其國名曰^レ安樂。「安樂」とは西方十萬億の仏土を越えた仏の世界で、地獄・餓鬼・畜生の「三途」の苦しみがなく、楽だけがある世界である。また『阿彌陀經』には

爾時佛告^レ長老舍利弗。從^レ是西方、過^レ十萬億佛土、有^レ世界^一。名曰^レ極樂^一。其土有^レ佛、號^レ阿彌陀^一。今現在說法。舍利弗、彼土何故名爲^レ極樂^一。其國衆生、無^レ有^レ衆苦^一。

但受^レ諸樂^一故名^レ極樂^一。

とあり、『無量壽經』で「安樂」と呼ばれていた阿彌陀佛のいる世界を「極樂」と呼ぶ。『阿彌陀經』と『無量壽經』で名称は異なるものの、西方十萬億刹の彼方にある苦なき世界ということにおいて共通しており、「極樂」「安樂」と仏典によって名称は異なれど西方阿彌陀佛浄土の世界を指しているようである。

一方『靈異記』における西方極樂世界に関する叙述に目を向けてみると、西方極樂を目指して修行した僧の話や実際に極樂への往生を果たした聖の話などはみられるものの、西方極樂世界の具体的な様相や性質についての記述は認められない。西方極樂世界、安樂国への志向が窺えるものの、西方極樂世界の様相を示す叙述や、いかなる世界として捉えていたかという認識については、『靈異記』のなかにはほぼ皆無であるといえる。このような傾向は「閻羅国」「黄泉」「地獄」等と称され、その世界の様相が詳細に描出される冥界とは対称的である。

極樂世界への往生が「秀れたる厭土」や「聖にして凡に非ざる」存在に限定され、かつ奇瑞として語られていることを考慮するならば、安樂国への転生そのものが一つの奇瑞なのであり、安樂園とは、衆生には極めて到達し難い聖地であることを意味する。凡夫の一人に過ぎない景戒にとつても到達し難き聖地であり、その存在を信じながらもいかなる世界なのかその様相を知り得ない、語り得ない世界としてあるのではないか。安樂園とは、衆生には到達し難く、語り得ることのできない（異界）であり、そのように衆生の住む人間界と隔絶されていることにお

いて聖地たりえているトポスなのである。

二 聖徳太子転生譚と五台山

—上巻第五縁、大部屋栖野古蘇生譚を中心に—

しかしながら、『靈異記』の中には「閻羅国」や「黄泉」といった世界とは相反する極楽世界を想起させる死後の世界が語られる話がある。上巻第五縁である。

和泉國に漂着した靈木を用い、後に吉野の比蘇寺に安置されることになる菩薩像をつつた大伴氏祖先大部屋栖野古が、死後三日にして蘇生し、冥界の様子を語る。大部屋栖野古が辿り着いた冥界とは、五色の雲に芳香がたなびく黄金の山で、そこで生前仕えていた聖徳太子と妙徳菩薩に出会い、八年後に起こる蘇我入鹿の乱と、太子が懺悔の後に仏像建立のため再び地上の宮に戻ることを太子より告げられる。そして妙徳菩薩から与えられた仙薬によって蘇生し、その後は難を逃れ長寿を得る。

この屋栖野古が訪れた世界は『靈異記』において唯一の極楽浄土的な死後の世界であり、「賛」において「妙徳菩薩」は文殊菩薩、「黄金の山」は五台山、「宮」に還りて仏を作りたてまつる」とは聖徳太子が聖武天皇に生まれ変わること、行基が文殊菩薩の化身であることが明かされる。いわば『靈異記』のなかで「聖皇」と賛美される聖武天皇が、聖徳太子に連なることが明示されるのである。

ところで、「黄金の山」は五台山なり」という解釈は、中国の聖地五台山と文殊菩薩信仰との関係に由来する^⑤。

唐の慧祥の著作である『古清凉伝』によると、五台山は元來「仙者之都」「名爲紫府」「常有紫氣」。仙人居之^⑥」などと言われ、神仙思想に基づいた靈地であったが、『華嚴經』菩薩住處品に「東北方有菩薩住處」。名「清凉山」。過去諸菩薩常於中住。彼現有菩薩」。名「文殊師利」。有「一萬菩薩眷屬」。常爲說法^⑦」とある文殊菩薩の住処の清凉山と重ねられ、文殊菩薩の常住する聖地として信仰されるようになる。法藏『華嚴經探玄記』卷十五には「五清凉山、則是代州五臺山是也。於中現有古清凉寺」。以冬夏積雪故以爲名^⑧」、「華嚴經疏」卷四十七には「五清凉山。即代州雁門郡五臺山也。於中現有清凉寺」。以歲積堅冰夏仍飛雪。曾無炎暑。故曰清凉^⑨」とあり、これらが成った七世紀末には『華嚴經』の清凉山は五台山という具体的な場所と比定され、神仙思想と仏教思想とが結びついた靈場であったと考えられる。

このように神仙の聖地から仏教の聖地へという変遷を辿る五台山であるが、五台山を聖地たらしめる一因であろう靈異について、『古清凉伝』によると、文殊菩薩の化現や仏光の奇瑞といった仏教的なものに加えて、「五色雲」や「瑞光」^⑩「香氣」^⑪また仙薬に関する話といった道教的なものが少なくない。これらは『靈異記』上巻第五縁の「五色の雲」「名香」といった叙述や、文殊菩薩から仙薬を授けられて服する場面と重なり、仏教と神仙の要素を共に有する中国の五台山との関係性が認められる。「東の宮」とは日本の国なり」という記述もまた五台山からみて日本国が東方に位置するという地理関係を窺わせよう。しかしながら聖徳太子や大部屋栖野古が死して後に訪れた世

界であることを鑑みると、実在する五台山ではなく五台山に仮託された死後の世界（異界）として捉えるべきであろう。日本を東に見る五台山の位置は、日本の側からみれば西方にあたり、『靈異記』で繰り返し言及される西方極楽世界の方角でもある。また「黄金の山」という景観は仏菩薩の金色世界浄土を彷彿とさせる¹²。

とりわけ、この五台山の〈異界〉としての性格を考えるうえで興味深いのは、「我、悔過し畢^{はら}はらば、宮に還りて仏を作らむ」という太子の発言である。この発言は、後に太子が聖武天皇として転生し、大仏を建立する予言であるが、一方で聖德太子もまた罪を負い悔過を必要とする存在として語られていることに注意したい。このことは、五台山が太子の生前の罪を滅除する世界、つまりは前世の罪を浄化する世界であることを示唆させる。山本謙治氏によると、中国の五台山もまた滅罪の地としての性格を有しており、滅罪の聖地としての性格は、応化身としての示現と滅罪という文殊菩薩が持つ属性による影響に加え、五台山信仰の最盛期である八世紀に至っては末法思想の流行に伴い、滅罪救済の末に成仏が果たされる聖地として認識されるようになり、ついには「五台山聖地は次なる浄土へ往生するための、いわば中繼的浄土地として意味付け」られ、文殊常住の地から来世への救済の聖地へと展開していったという。山そのものが〈異界〉であるだけでなく、〈異界〉と〈斯界〉とのあいだに位置する境界的なトポスでもあることはすでに諸学指摘されていることだが、五台山はさらに仏教的な意味付けが付与され、浄土と人界とのあいだに位置する中間的な世界、滅

罪の末に往生が約束される聖地であつたといえよう。このような五台山の聖地としての在り方は、『靈異記』の五台山に比された世界においても無関係ではあるまい。『靈異記』における五台山に比された〈異界〉もまた、滅罪の末に安楽国への道が約束された世界と考えられるのではないか。

そのような世界に聖德太子と文殊菩薩が存在し、聖武天皇が聖德太子の後身であること、行基が文殊菩薩の化身であることが明かされるとはどういうことか。『靈異記』が理想の聖代とする時代の「聖皇」である聖武天皇と、「隠身聖」と称される行基が、それぞれ聖德太子と文殊菩薩の後身であるというに留まらない。人界と浄土との中間に位置する滅罪の地という五台山の性格を鑑みるならば、五台山における聖德太子の滅罪と聖武への転生の先には、安楽国への転生が想起される。つまり聖德太子と聖武天皇は、五台山を媒介としながら安楽国との関係においてその聖性が保証されていることになるのではないか。『靈異記』の五台山という〈異界〉は、聖武天皇と聖德太子とを転生の論理によって結びつけるとともに、聖德太子や行基の聖性さらには聖德太子の後身である聖武天皇が「聖皇」でありその御代を「聖代」とする認識を、安楽国との関係において保証しているのではないだろうか。

聖武天皇とその御代を称揚する意識は、とりわけ中巻序文に顕著である。

瑞應の華は競ひて国邑^{くに}に開き、善惡の報は現にして吉凶を示す。故に勝宝応真聖武太上天皇と称めたてまつる。唯^{ただ}り以^{もつ}ば、是の天皇のみ代に録す所の善惡の表は、多数

なりと者へり。聖皇の徳あまの顕かなるに由りて、事は最も多し。

『靈異記』において仏の奇瑞の顕現は天皇の徳に基づく。聖武天皇の御代に「善惡の表」が「多数」であることは「聖皇の徳」に基づくのであり、それ故に聖武天皇は「聖皇」なのである。そして「聖皇の徳」は、聖德太子の後身であることとともに安樂国との關係に由来するのではなからうか。

西方安樂国に関する具体的な様相について『靈異記』では一切記されないと先述したが、記されずとも安樂国の聖性がすでに前提としてあり、警戒をはじめ衆生には到底語り得ず到達し得ないほどの聖性をもつて存在する（異界）であるとする、聖德太子や聖武天皇の聖性を裏づける安樂国や五台山の持つ意味は大きい。安樂国という（異界）の存在との關係においてこそ、聖武天皇は「聖皇」であり、その御代は「聖代」なのである。そして安樂国への転生が約束された「聖皇」の治める「聖代」こそが『靈異記』が理想とする仏国土たりうるのである。『靈異記』の天皇観や聖代観——日本国を仏国土と捉える自主意識——は、安樂国という（異界）との關係に支えられているといえよう。

三 人身から人身への転生——変奏される聖代——

聖德太子から聖武天皇への転生は、「人身」から「人身」へという転生である。『大般涅槃經』光明遍照高貴德王菩薩品に「人身難得、如『優曇花』とあるように、「人身」から「人身」への転生はおろか、「人身」として生を得ること自体が困難と考えられていた。このような認識は、仏足石歌一六番歌「人の身は 得がたくあれば 法の爲の 因縁よすがとなれり 努め諸もろもろ

進め諸」にも見られ、『靈異記』の編纂された時代にはすでに知られていたと思われる。

『靈異記』の中にも因果応報に基づく輪廻転生の事例が認められるものの、「人身」から「人身」への転生となると極めて少ない。特に善因善果に基づく「人身」から「人身」への転生となると先の聖武天皇と聖德太子の他には、二人の高僧がそれぞれ桓武天皇の皇子に転生する下巻第三十九縁の例のみである。

下巻第三十九縁は、善珠と寂仙がそれぞれ大徳親王、嵯峨天皇に生まれ変わる転生譚であり、善珠と嵯峨天皇はそれぞれ「人家々」「聖君」と称される。「人家々」とは「俱舍論」や「瑜伽師地論」など唯識經典にみられる概念である。

謂有二種家家一。一天家家。二人家家。天家家者。謂於二天上一從レ家至レ家。若往若來證二苦邊際一。人家家者。謂於二人間一從レ家至レ家。若往若來證二苦邊際一。當知此二俱是預流補特伽羅。

「人家々」とは「天家々」と対になる「家家」の一つである。「家」とは家より家へと至るという意味から、「天家々」は天界で、「人家々」は人間界において転生を繰り返すことで悟りに達する成仏の修道の段階に入った聖者を指す。つまり警戒は「人身」から「人身」へと転生した存在を後に輪廻転生の連続を離れ成仏を約束された「人家々」の聖者と認識していたと考えられる。「人身」から「人身」への転生ということにおいて、聖德太子と聖武天皇もまた「人家々」にあたる。「人家々」の聖者であることは、安樂国への成仏の階梯に至った存在であることであり、つまりは聖德太子の後身である聖武天皇は安樂国への往

生が約束された存在ということになる。このことから、聖武天皇が「聖皇」であり、その御代が「善悪の表」が頻出する「聖代」であるという認識は、「人身」から「人身」への転生という「奇事」が示す安楽国との関係によるといえるのではなかろうか。

さらには、高僧から桓武天皇の皇子という下巻第三十九縁の転生譚とは、『靈異記』が理想とする「聖皇」「聖代」を成立させた聖德太子から聖武天皇へという「人身」から「人身」への転生の変奏ではないだろうか。「人身」から「人身」への転生を果たした聖武天皇を「聖皇」、その御代を「聖代」と捉えるならば、同じく「人身」から「人身」へ転生した嵯峨天皇もまた「聖君」であり、その御代は「聖代」であることになる。「聖皇」「聖武天皇」とその御代を生み出した転生が、景戒自身が生きる嵯峨天皇の御代という「今」において変奏され、「今」もまた、聖武天皇の御代と同様に「聖君」が統治する「聖代」であることが、下巻第三十九縁の転生譚において示されているのである。ここに、過去の「聖代」の転生譚の変奏を通じて、「今」の御代を、「今」の「日本国」を、安楽国との関係が密接である仏国土として定義しようとする景戒の自土意識を看取できるのではないだろうか。

以上、『日本靈異記』における安楽国という「異界」のトポスについて考察してきた。安楽国は、衆生には到達し難い「異界」であり、それゆえに理想の聖地として存在する。だからこそ安楽国に近い存在を聖者たらしめ、安楽国への階梯にある存在が統治する国を仏国土たらしめるトポスであるといえよう。そして景戒による『日本靈異記』の実践とは、日本国と安楽国と

の関係を「自土の奇事」を通じて感得する実践、つまりは、安楽国という「異界」との関係のなかで日本国を仏国土というトポスとして見出し、いく実践でもあったのではないだろうか。

注(一) 『日本靈異記』の引用は、多田一臣校注『日本靈異記』

上中下(ちくま学芸文庫、一九九七—一九九八)により、新日本古典文学大系本(出雲路修校注、岩波書店、一九九六年十二月)と新潮古典文学集本(小泉道校注、新潮社、一九八四年十二月)を併せて参照した。仏典の引用は、大正新修大蔵経の本文により、訓読は国訳一切経、岩波文庫本を参照した。

(2) 『日本靈異記』を景戒の実践として捉える研究として、

渡部亮一「説話集」を書く論理―『日本靈異記』上巻序―『日本文学』第五三巻八号、二〇〇四年三月)などがある。

(3) 多田一臣「自土意識をめぐって」(古代国家の文学―日本靈異記とその周辺―三弥井書店、一九八八年一月)。

(4) 上巻二十二縁、中巻第二縁、下巻三十縁など。

(5) 五台山については、日比野文夫、小野勝年『五台山』(平凡社、一九九五年九月など)、『日本靈異記』上巻第五縁と五台山との関係について触れられた研究に、渥美かをる「日本靈異記における説話の形成過程―特に上巻第五縁をめぐって―」(『説林』第十七号、一九六八年十二月)、吉田靖雄「文殊信仰の展開」(『日本古代の菩薩と民衆』吉川弘文館、一九八九年七月)、朝枝善照「日本靈異記と五台山仏教文化圏について」(『日本古代国家の展開』下、思文閣出版、一九九五年)、同「華嚴の世紀―五台山仏教文化圏と東大寺」(『華嚴学論集』大蔵出版会、一九九七年)、河

野貴美子「日藏（道賢）上人と五台山」（『アジア遊学』第
二二号、二〇〇〇年十二月）などがある。

瑜伽處一（大正蔵三〇—四二五a）。

(6) 大正蔵五一—一〇九三a。

(7) 大正蔵九—五九〇a。

(8) 大正蔵三五—三九一a。

(9) 大正蔵三五—八五九c。

(10) 「僧名遠靈裕等二十八人、先向東臺、見五色慶雲」。（中
略）名遠於中臺佛塔東南六十餘歩、又見雜色瑞光」（大
正蔵五一—一〇〇a）など。

(11) 「後聞五臺山文殊所居、古來諸僧多人祈請。遂超然杖
錫。來詣清涼。適至於山下、聞殊香之氣。」（大正
蔵五一—一〇九八a）など。

(12) 『広清涼伝』では、五台山全体は「金色世界報土」（大正
蔵五一—一〇三b）といった金色の聖なる世界として表
現される。八世紀後半から九世紀にかけての日本において
も、例えば『七大寺巡礼私記』による玄昉著『五台山記』
（七二五）では、五台山巡礼における文殊化現の奇瑞が金
色の世界として描出され、円仁「入唐求法巡礼行記」開成
五年四月二八日条はに「此即ち清涼山、金色世界、文殊師
利現在利化のところなり」とあり、五台山を金色世界とみ
る叙述がみえる。

(13) 山本謙治「五台山における聖地信仰の形成—仏教聖地形
成の一例として—」（『人文科学』第一一号、一九九一年三月）。

(14) 『日本霊異記』における天皇と「表（奇事）」との関係に
ついて、渡部亮二「日本霊異記」の天皇と經典世界の王」（大
阪青山短期大学研究紀要」第三二号、二〇〇七年四月）など。

(15) 『瑜伽師地論』卷第二十六、本地分中声聞地第十三第二